

情報科学研究科

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】（参考）

情報科学研究科では、修士課程および博士後期課程ともにコースワークとリサーチワークを適切に組み合わせた教育が行われている。4つの研究領域により教育課程を編成し、専門分野の高度化に即応できる教育が提供されている。また、外国人特別入学制度による外国人留学生の積極的な受け入れ、理工学研究科と共同の IIST 修士学生の入学、ダブルディグリープログラム卒業生および数名の外国人が博士後期課程に進学予定などの成果からグローバル化推進のための積極的な取り組みが確認できており、評価できる。特に、情報科学オープンセミナーが研究領域の俯瞰、履修誘導、英語プレゼンテーション練習、また教員と学生の交流の場となり、研究活性化、研究指導、学習指導など重要な役割を果たしており、研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導が行われていることは評価できる。一方で、2019年度のダブルディグリープログラムの学生が1名だけとなっている。学生の獲得に向けた取り組みが進められているが、引き続きの努力を期待したい。修士論文審査および博士学位審査ともに、審査基準をあらかじめ学生が把握できる環境にあり、審査の責任体制が明確化され適切に学位授与されている。研究成果の指標となる論文の学会投稿数、発表数、表彰数をデータベース化し情報共有することにより学習成果が把握されるとともに、各種奨学金の選抜の指標として利用されており、学習成果が活用されていることは評価できる。顕在化した課題を教授会資料に内部質保証の項目を設け、活動記録として残すことに活用しており、研究科内のFD活動が適切に行われている。教員の研究を加速する大学院生を増やすために、学外研究発表の奨励や学会参加費および旅費の補助を行い、研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策も高く評価できる。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2018年9月に1名だけであったダブルディグリープログラムの入学者数が、2019年9月は4名となり、改善された。さらに IIST を通じて、2019年9月に博士後期課程で2名、修士課程で3名の入学者を受け入れた。また、2020年度中に中国模範的ソフトウェア学院連盟とのダブルディグリープログラム協定を更新する予定である。一方で、現在は COVID-19 による不確定要素が多くあり、今後の影響を見定める必要がある。2020年度以降も、将来のグローバル化の方向性を定めつつ、日本人学生にとっても、魅力的な研究科づくりを継続して進めていく予定である。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

情報科学研究科では、コースワークとリサーチワークを適切に組み合わせた教育を実施し、専門分野の高度化に即応できる教育が適切に提供されているとともに、外国人留学生を積極的に受け入れる体制を構築している点が高く評価される。2019年9月には、ダブルディグリープログラムの入学者数が改善し、IIST による外国人入学者の安定的な確保が実現しつつあり、高く評価される。外国人留学生の受け入れについては、2020年度は COVID-19 による影響が心配されるが、2020年度以降の経過を引き続き見守りたい。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2020年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①修士課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。

S A B

※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。

コースワークは2年間で18単位、リサーチワークは同じく2年間でオープンセミナー2単位、特別研究1A、1B、2A、2Bで計6単位、特別演習1A、1B、2A、2Bで計4単位の構成となっている。本研究科では、コースワークは主に修士論文作成に向けた研究の遂行に必要な専門知識の獲得と位置付けている。リサーチワークは実践的な研究能力の向上に資するものと位置付けている。特に、2019年度からリサーチワークのセメスター化を実現し、9月から1年間の留学や半期留学に対応しやすい履修体系を整えた。学生は当該教育研究領域の開講科目と周辺領域での開講科目とから18単位分を修得する。各教育研究領域で開講される科目群は、英語で講義が行われるものと日本語で講義が行われるものとが用意されて

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

おり、学生は自身の能力に応じて選択するが、当該分野周辺の専門技術習得のために十分な技術基盤が得られるように配分している。リサーチワークにおいては、時間管理および進捗管理を進めるため、2月に修士論文中間発表会をポスター発表の形で開催している。修士論文発表会は2トラックで多くの教員が質疑に参加できるように配慮するなど、評価の公平性を保ちつつ、評価の厳格化を目指すことで修士論文の質の向上を図っている。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2019年度からリサーチワークおよび修士論文をセメスター単位の履修科目に変更することで、留学などに柔軟に対応できるようにした。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・大学院学則
- ・ <https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/graduate/>
- ・ <https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2020/03/2020gs-courseoutlines1.pdf>
- ・ <https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2020/03/2020gs-courseoutlines2.pdf>

② 博士後期課程において授業科目を単位化し、修了要件としていますか。

はい いいえ

【根拠資料】 ※「はい」を選択した場合に単位化及び修了要件として設定されていることが確認できる資料を記入。

- ・大学院学則
- ・ <https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/graduate/>
- ・ <https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2020/03/2020gs-courseoutlines1.pdf>
- ・ <https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2020/03/2020gs-courseoutlines2.pdf>

③ 博士後期課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。

S A B

※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。

2016年度から博士後期課程にコースワークを導入した。各教育研究領域にリサーチワークとして特別研究と特別演習を置き、さらにコースワークとしてプロジェクト科目を設置して両者を組み合わせた教育課程を行うものである。コースワークは、問題解決能力を育成するものと位置付けており、リサーチワークは文字通り自身の研究能力を向上させるだけでなく、研究指導能力までも養成すると位置付けている。

【2019年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2019年度からリサーチワークをセメスター化し、博士後期課程の途中で留学する場合などに柔軟に対応できるようにした。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・大学院学則
- ・ <https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/graduate/>
- ・ <https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2020/03/2020gs-courseoutlines1.pdf>
- ・ <https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2020/03/2020gs-courseoutlines2.pdf>

④ 専門分野の高度化に対応した教育内容を提供していますか。

S A B

※学生に提供されている専門分野の高度化に対応した教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

【修士】

情報科学にはコンピューティングに関する要素研究と、コンピュータ上において情報処理問題を扱うコンピュータシステム、さらに社会的ニーズに基づく対象をトータルシステムとして解決するための情報システムの教育研究がある。本研究科では、学部での教育コース（コンピュータ基礎、情報システム、メディア科学）の上に3つの研究領域と国際化対応を目指した4つ目の研究領域とを配置して専門技術習得のために十分な知識および技術基盤が得られるように教育課程を編成している。それぞれの領域のテーマと開講科目とを以下に示す。

第1研究領域（コンピュータ基礎）：情報システムを構築するための並列コンピュータの構造論、ソフトウェア環境、暗号理論、ソフトウェア検証などの研究を行う。

第2研究領域（情報システム）：人工知能、進化計算、データマイニング、Webシステム構築などの研究を行う。

第3研究領域（メディア科学）：音声・言語処理、パターン認識、形状モデリングなどの研究を行う。

第4研究領域（国際化対応情報科学）：国際化対応のための技術英語・論文・発表技術、先端ビジネスアプリケーションシステム開発などの研究を行う。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

また、最新の研究活動について知る機会として、選択科目の情報科学特別講義と、各教員がオムニバス形式で実施する必修科目の情報科学オープンセミナーを開講している。

【博士】

博士後期課程の教育は、それぞれの専門分野における研究活動を推進するリサーチワークと、幅広い知識を養うためのコースワークに分かれている。リサーチワークでは、専任教員の指導のもと、難易度の高い国際会議への投稿および発表を推進している。コースワークでは、第1研究領域(コンピュータ基礎)、第2研究領域(情報システム)、第3研究領域(メディア科学)から、バランスよく領域を選択させ、広い知識の習得を心掛けている。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ <https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/graduate/>
- ・ <https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2020/03/2020gs-courseoutlines1.pdf>
- ・ <https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2020/03/2020gs-courseoutlines2.pdf>

⑤大学院教育のグローバル化推進のための取り組みをしていますか。

S A B

※大学院教育のグローバル化推進のために行っている取り組みの概要を記入。

【修士】

中国模範的ソフトウェア学院との間でダブルディグリープログラム (DDP) を進めているほか、英語で行う授業と日本語で行う授業とを用意しており、学生の能力に応じて選択できる。これら英語授業には例年日本人学生の履修実績があり、一般学生のグローバル化推進にも役立っている。また、外国人留学生を積極的に受け入れるよう、外国人特別入学制度を用意している。大学院学生に対する教育の一環として、英語でのプレゼンテーション能力を養いグローバルな視点を持たせるため、海外学会での研究発表を強く奨励している。海外学会の発表が決まった学生は、情報科学オープンセミナーにて発表練習する場を設けている。また、留学生にも正しい日本語と日本文化についての知識を与えるべきであるとの判断から、日本語理解1、2の科目(修了単位には数えない)を開講している。

理工学研究科と共同での英語による学位授与を行う IIST を 2016 年 9 月に開設し、2019 年度には 2 名の学生が修士課程に入学した。

修士論文の審査及び評価においては、国際会議での発表を加点しており、教員の指導の下、積極的な論文発表が行われている。今後も、国際会議での論文発表への誘導を図りグローバルに活躍できる人材育成を助成し、強化する。

【博士】

理工学研究科と共同での英語による学位授与を行う IIST を通して、ダブルディグリーの卒業生が博士後期課程に 2 名進学している。2019 年度には、さらに 3 名の外国人が博士後期課程に進学し、学生のグローバル化が進んでいる。国際会議での表彰実績もあがってきている。

博士論文の審査及び評価においては、論文あるいは国際会議発表を条件にしており、教員の指導の下、積極的な論文発表が推奨されている。今後も、国際会議での論文発表への誘導を図りグローバルに活躍できる人材育成を助成し、強化する。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2019 年 9 月に IIST を通じて博士後期課程で 2 名、修士課程で 3 名の入学者を受け入れた。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 学籍
- ・ 論文発表データベース (CIS Moodle 上に構築)

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S A B

※履修指導の体制および方法を記入。

【修士】

・ 修士1年に、各教員のオムニバスによる情報科学オープンセミナーを必修科目として配置することで、最新の技術動向を幅広く認知する機会を与え、多様な研究領域への興味の誘発と、以後の履修の誘導を行っている。

・ 第4研究領域に配置された科目(英語で講義を実施)を含めてより充実したカリキュラムを運用し、専任教員だけでなく企業からも講師を招いていることから、学生のより広範囲に渡る研究領域の俯瞰を可能としている。

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

・学生は、自身の研究テーマにおいて問題解決に必要な専門技術習得のため、自主的にもしくは指導教員の指導の下に履修科目を選定している。
 ・指導教員は定期的に研究進捗報告を受けて、適切な助言や学習指導を行っている。

【博士】

・学生は、指導教員のもと、適切なコースワークを選定している。
 ・学生は、自身の研究テーマにおいて問題解決に必要な専門技術習得のため、自主的にもしくは指導教員の指導の下に技術の調査研究を進めている。
 ・指導教員は定期的に研究進捗報告を受けて、適切な助言や学習指導を行っている。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・情報科学オープンセミナー (<https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/special/>)

②研究科（専攻）として研究指導計画を書面で作成し、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。

はい いいえ

※ここでいう「研究指導計画」とは、事務手続きのスケジュールやシラバス等の個別教員の指導計画を指すのではなく、研究科としての研究指導体制及び研究指導スケジュールをまとめたものを指します（学位取得までのロードマップの明示等）。また、「あらかじめ学生が知ることの状態」とは、HP や要項への掲載、ガイダンスでの配布等が考えられます。

【修士】

・ガイダンス時に研究指導計画について書面を用いて説明を行っている。
 ・課程紹介の Web ページ上で、学習および研究活動の時間的流れを公開し、研究指導に活用している。

【博士】

・ガイダンス時に研究指導計画について書面を用いて説明を行っている。
 ・課程紹介の Web ページ上で、学習および研究活動の時間的流れを公開し、研究指導に活用している。

【根拠資料】 ※研究指導計画が掲載された文書・冊子等の名称を記入。

・<https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/degree/>

③研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導を行っていますか。

はい いいえ

※組織的な研究指導、学位論文指導の概要を記入。

【修士】

修士課程の学生は修士課程2年間で少なくとも1回は学外研究発表を行うことを前提に研究指導が行われていて、修士論文発表会で確認している。ダブルディグリープログラムの学生についても同様の方法で指導を進めている。また、修士学生の場合は入学の1年後、ダブルディグリープログラムの学生は半年後、中間発表会で研究進捗をポスター発表し、全教員から研究の方向性についてのコメントを得る機会を与えている。

【博士】

博士前期課程の学生は、毎年、中間発表会で研究進捗をポスター発表し、全教員から研究の方向性についてのコメントを得る機会を与えている。また、研究科長が指導教員に対して、学位取得に関する具体的な計画について、その進捗を毎年確認している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・第303回（2019年度第14回）情報科学研究科教授会議事録

1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。

S A B

※成績評価と単位認定の確認体制及び方法を記入。

【修士】

・シラバスで事前告知した基準に基づき、成績評価を行っている。
 ・成績の確認においては、入力ミス等に対して、申告に基づき教授会での成績訂正手続きが公正に実施されている。
 ・ダブルディグリープログラムにおける単位互換認定については、先方の大学院シラバスと当方のシラバスとを対比させて厳密に単位認定を行っている。
 ・修士論文については、副指導制度を導入し、合議で成績評価を行っている。

【博士】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・シラバスで事前告知した基準に基づき、成績評価を行っている。 ・学位論文については、論文審査委員会を設置し、予備審査と本審査により厳格な学位認定を行っている。 	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	
②学位論文審査基準を明らかにし、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>※学位論文審査基準の名称及び明示方法を記入。</p> <p>【修士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ガイダンスにおいて、書面にて学位論文審査基準を配布し、説明を行っている。 ・毎年発行する小金井大学院要項に学位論文審査基準を明記し、年度初めのガイダンスで学生に周知している。 ・Web ページ上で、「学位修了要件」を公開している。 <p>【博士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ガイダンスにおいて、書面にて学位論文審査基準を配布し、説明を行っている。 ・毎年発行する小金井大学院要項に学位論文審査基準を明記し、年度初めのガイダンスで学生に周知している。 ・Web ページ上で、「学位修了要件」を公開している。 <p>【根拠資料】 ※学位論文審査基準にあたる文書の名称を記入。また、冊子等に掲載し公表している場合にはその名称を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報科学研究科修士課程学位審査内規 ・情報科学研究科博士後期課程学位審査内規 ・博士学位申請資格対象となる学術誌及び学術会議基準 ・小金井大学院要項 ・学位修了要件 (https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/graduate/) 	
③学位授与状況（学位授与者数・学位授与率・学位取得までの年限等）を把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>※簡条書きで記入※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学院在籍者数の確認は、年度初めに教授会に報告されている。 ・学位授与率に関わる情報（退学者、休学者）については、届け出の後教授会の議題となっており、教授会で把握できる。 ・中間発表会での討論では直接的に進捗を把握しており、これらの情報を総合することでその年度の学位授与見込み数（同時に在籍年数）を把握している。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 313 回（2020 年度第 1 回）情報科学研究科教授会議事録 	
④学位の水準を保つための取り組みを行っていますか。	S <input type="checkbox"/> A <input checked="" type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>修士課程の大学院生には、1年生の秋学期末に中間発表会を義務付けている。ポスター発表形式で開催し、研究活動内容を報告させるとともに、研究の内容や進捗度を評価し、優秀者を表彰している。優秀者を決める投票には、教員だけでなく参加院生も加わるため、大学院生同士も互いに評価し合うことになり、モチベーションを高める効果がある。また、論文発表データベースを作成し、他の学生の学会発表状況を共有することにより、各学生のモチベーションを高める試みを2018年度に開始した。</p> <p>【博士】</p> <p>博士後期課程においても、2014年度から学位申請を行っていない学生については、修士課程学生の場合と同様に中間発表を義務付けている。</p> <p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 303 回（2019 年度第 14 回）情報科学研究科教授会議事録 	
⑤学位授与に係る責任体制及び手続を明らかにし、適切な学位の授与が行われていますか。	S <input type="checkbox"/> A <input checked="" type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>※責任体制及び手続等の概要を記入。ただし、博士については、学位規則のとおりに行われている場合には概要の記入は不要とし、「学位規則のとおり」と記入。</p> <p>【修士】 修士課程では、修士論文審査にあたり、「法政大学学位規則」を順守し、主査および副査が修士論文発表会場で厳密に審査し、その後の教授会場で最終的な修了認定を行っている。審査基準を明確にするために、「情報科学研究科修士課程学位審査内規」を策定し運用している。副査は、指導教員である主査が指名した研究領域に近い教員と、研究科長が指名した教員の2名で構成し、適切かつ客観的に学位授与の質保証を行っている。</p>	
<p>【博士】 学位審査内規のとおり</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・情報科学研究科修士課程学位審査内規 ・情報科学研究科博士後期課程学位審査内規 ・情報科学研究科博士後期課程における質保証のためのガイドライン</p>	
⑥学生の就職・進学状況を研究科（専攻）単位で把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。 ・論文指導教員が把握し、大学院の担当を兼ねる学部の就職担当がそれらを取りまとめて、Web上のスプレッドシートで共有している。 ・スムーズな就職活動を目的として、大学院生へのインターンシップ参加を強く勧めている。さらに徹底するために、インターンシップの単位化を2016年度から導入した。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・情報科学部教授会議事録（学部と大学院の就職状況をまとめて報告）</p>	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>※取り組みの概要を記入。 【修士】 情報科学領域では、研究成果を国内・海外の学会への投稿論文数と会議発表論文数、表彰数が重要な指標となり、これらの数値で学習の達成度を評価している。この指標に基づき、各種奨学金等の優秀学生の選抜を実施している。これらの研究成果については論文発表データベースを構築し、学生間、および、教員間で共有している。また、学会表彰を受けた学生については、修了証書授与式にて、研究科表彰を実施し、学生の学会参加意欲を高めている。</p>	
<p>【博士】 国内・海外の学会への投稿論文数と会議発表論文数、表彰数が重要な指標となり、これらの数値で学習の達成度を評価している。この指標に基づき、各種奨学金等の優秀学生の選抜を実施している。これらの研究成果については論文発表データベースを構築し、学生間、および、教員間で共有している。</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・日本学生支援機構奨学金返還免除の推薦候補者選考規定</p>	
②具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。</p>	
<p>【修士】 ・論文発表データベースを構築し、論文投稿、学会発表、学会表彰について学生自らが登録し、情報共有するシステムを導入している。 ・修士課程においては、修士論文審査にあたり、「法政大学学位規則」を順守し、主査および副査が修士論文発表会場で厳密に審査し、その後の教授会場で最終的な修了認定を行っている。審査基準を明確にするために、「情報科学研究</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

科修士課程学位審査内規」を策定し運用している。

【博士】

・論文発表データベースを構築し、論文投稿、学会発表、学会表彰について学生自らが登録し、情報共有するシステムを導入している。

・博士後期課程については、審査委員会（研究科教授会）のもと、主査・副査3名以上で構成される審査小委員会が試験によって博士論文に関する学識を確認し、審査委員会にその結果を報告し、審査委員会で審議をしたのち、博士学位授与の可否を決定している。なお、主査は本学専任教員に限るが、2名以上の副査を合わせて、審査小委員会の委員総数の3分の1以内の範囲で学外者も副査に加えることができる。こうした審査基準は「情報科学研究科博士後期課程学位審査内規」および「博士学位申請資格対象となる学術誌及び学術会議基準」にまとめられており、修士課程同様に学生に周知している。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・情報科学研究科修士課程学位審査内規
- ・情報科学研究科博士後期課程学位審査内規
- ・情報科学研究科博士後期課程における質保証のためのガイドライン

1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。

S A B

※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

【修士】

・研究科として、修士1年生での修士論文中間発表会と、修士2年生での修士論文発表会を学生の教育成果の検証の機会と位置付けている。発表会の質を判断材料にして、翌年度以降の教育内容の改善を図っている。

・中間発表会はポスター形式の発表であるため、時間をかけて評価でき、学生同士の評価も行われるので、学生に対するフィードバック効果も大きい。

【博士】

・研究科として、毎年1回の中間発表会を、学生の教育成果の検証の機会と位置付けている。発表会の質を判断材料にして、翌年度以降の教育内容の改善を図っている。

・中間発表会はポスター形式の発表であるため、時間をかけて評価でき、学生同士の評価も行われるので、学生に対するフィードバック効果も大きい。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。

・学生による授業改善アンケートを教育内容・方法の改善のための有力なツールと位置づけ、授業内にアンケートを実施することで、高い回収率を実現し、授業改善に活用している。

・講義内容に関しては、技術の進展が早い分野であるので日々見直しを行っており、適宜教授会や懇談会などの場で方向性を議論し、新規教員採用時、および次期 Semester 兼任講師への講義依頼時にその検討結果を反映させている。

・専任教員の間においては、情報科学オープンセミナーを教員相互の教育・研究の情報交換の場と位置づけ、相互の教育・研究の活性化や相互の連携を図る場として活用している。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・情報科学オープンセミナー計画:<https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/special/>

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・修士論文の中間発表会は、1年経過時の学習状況を把握する場として、貴重な機会である。研究のマイルストーンになるだけでなく、他研究室の教員の評価を聞くことで、全体の学位授与の質保証につながることができている。博士後期課程の大学院生には、毎年、中間発表を課しており、学位授与に至る経過管理として重要な役割を担っている。 ・国際会議での発表を奨励し、学位授与時の学習成果の評価に活用している。 	1.4、1.5

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

情報科学研究科では、修士課程および博士後期課程ともにコースワークとリサーチワークを適切に組み合わせた教育が行われ、専門分野の高度化に即応できる教育が行われている。特に、2019年度より、リサーチワークおよび修士論文のセメスター化を実現し、学生が9月から1年間の留学や半期留学に柔軟に対応しやすい履修体系を整えたことは高く評価される。また、中国模範的ソフトウェア学院との間でダブルディグリープログラム（DDP）を進めている点、英語で行う授業と日本語で行う授業を用意し、学生の能力に応じて選択できる点、海外学会での研究発表を強く奨励しそのサポートをしている点、留学生への日本語と日本文化についての科目を設置している点など、グローバル化推進に力を注いでいる点は高く評価される。さらに、学生の学習の活性化のための方策、計画的な研究指導體制の構築、厳正な成績評価、単位認定および学位認定の確認体制も適切に設定され、学生に周知されている。また、修士1年での修士論文中間発表会と修士2年での修士論文発表会、博士後期課程では毎年、中間発表を課しており、学生の学習成果の検証の機会と位置付けられるとともに、発表内容の質を判断し翌年度以降の教育内容の改善を行っている。

このように、教育課程および学習成果を定期的に検証し、改善・向上のための取り組みを継続的に行っており、総合的に高く評価される。

2 教員・教員組織

【2020年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	
①研究科（専攻）独自のFD活動は適切に行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>【FD活動を行なうための体制】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「情報科学オープンセミナー」は、教員の研究テーマについて交流する場として、全教員のプレゼンテーションを2年間で1周回る形式で行っている。原則、全教員の参加が求められる。 ・隔週開催の主任会議でその時々の問題点を抽出し、改善に向けた取り組み（対策）を講じている。より大きな問題については、研究科に設置された質保証委員会に付託して突っ込んだ議論をし、教授会でさらに議論・決議し、対策を実行している。ガイドラインや内規としてまとめ直して運用することもある。 <p>【2019年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報科学オープンセミナー（春学期の隔週金曜3限、教員の研究活動の発表、原則的に教員全員参加） ・主任会議（隔週水曜日、その時々の問題点と改善策の検討、主任会議メンバー） <p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報科学オープンセミナー予定 https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/special/ 	
②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外部資金獲得の取り組みを進め、2020年度の科研費に4件の新規採択があった。 ・資格を持つ教員が早い時期に在外研究・国内研究を行うことを奨励 	

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・在外研究・研修、国内研究・研修の成果を、オープンセミナーを通して教員間で共有 ・教員の研究を加速するために、共同研究者としての大学院生入学者を増やす対策 <p>1) 学外研究発表の奨励</p> <p>2) 学会参加旅費、登録費の補助</p> <p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>2019年度に応募した科研費について、4件が内定を受け、2020年度から研究を開始する。2020年度国内研究員1名を決定した。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・2019年度には在外研究・研修、国内研究・研修は行われなかったものの、概ね各年度に1名以上がこれらの枠組みによる研究活動を行っており、2019年度には2020年度国内研究員1名を決定した。教員の研究活動を活性化させることで、研究の質の向上と、グローバル化への対応力を強化している。 	2

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	

【この基準の大学評価】

<p>情報科学研究科では、教員の研究テーマについて交流する場として、全教員が参加する「情報科学オープンセミナー」を設定し、全教員のプレゼンテーションを2年間で1周回る形式で行っている。また、主任会議で教員組織全般にわたる問題点を定期的に抽出し、改善に向けた対策を講じている。さらに、2018年度から教授会資料に内部質保証の項目を設け、活動記録として残すなど、情報共有に努めている。また、資格を持つ教員が早い時期に在外研究・国内研究を行うことを奨励するなど、研究科内のFD活動が適切に行われていることは高く評価できる。</p>
--

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	内部質保証	
1	中期目標	質保証サイクルの実質化し、かつ、記録に残すことで、教授会構成員全員の質保証の意識を高める活動を行う。	
	年度目標	—	
	達成指標	—	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	—
		理由	—
		改善策	—
質保証委員会による点検・評価			
所見	—		
改善のための提言	—		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
2	中期目標	情報処理学会あるいはACMが定めたカリキュラムを大学院向けに発展させた教科・科目を実施しつつ、先進的な教科・科目を柔軟に組み込む。学外研究機関や、産業界、地域社会等の多様な機関と連携し、研究タイプ・開発タイプなど多様なキャリアパスに対応した教育を展開する。国際化に向け、英語開講科目の設置や国際会議への参加を促進する教育体制を確立する。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	年度目標	2020年度に実施予定の専任教員の開講科目を基本的に隔年開講にする改正について、学生への周知の徹底を行う。
	達成指標	隔年開講に関する学生への周知。先取り科目の履修促進。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	大学院ガイダンスおよび4年生向けガイダンスで、大学院の隔年開講科目について周知した。また、先取り科目の位置づけを明確にするために、成績をSからCまでの評価を与えることができるように学則改定に至る進言を研究科長会議に対して行い、承認を受けた。
	改善策	2020年度に、隔年開講が開始されるため、学生の混乱がないように、更なる周知をはかる。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	達成状況はAと判定する。理由は下記の通り。 (1) 大学院科目の隔年開講について大学院ガイダンスで周知した。 (2) 先取り科目の履修について4年生向けガイダンスで周知した。 (3) 大学院科目の隔年開講の効果の評価方法が明確でない。
	改善のための提言	2020年度の隔年開講の開始と合わせて、当施策の評価方法を明確にする。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
3	中期目標	学生に幅広い専門性を身に付けさせるため、複数の教員が研究指導を行うような組織的な教育・研究指導体制の定着を目指す。国際化に向け、英語力を点検できる教育課程を確立する。
	年度目標	情報科学オープンセミナーにおける学生による国際会議発表準備のためのプレゼンテーションを推進する
	達成指標	情報科学オープンセミナーによる学生の英語プレゼンテーション回数
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	春学期の情報科学オープンセミナーで学生2名が英語プレゼンテーションを行い、秋学期には、情報科学オープンセミナーの枠外で学生1名が英語プレゼンテーションを実施した。
	改善策	論文発表DBでは、国際会議の発表者は12名おり、9名は学内での英語プレゼンテーションを行わないままに、国際会議で発表を行っていることになり、来年度以降、周知徹底を強化する。
質保証委員会による点検・評価		
所見	達成状況はBと判定する。理由は下記の通り。 (1) 情報科学オープンセミナーでの学生の英語プレゼンテーションを強く奨励した。 (2) 国際会議発表者12名の内、当該セミナーで英語プレゼンテーションを行ったものが3名に留まった。	
改善のための提言	国際会議で発表する学生には情報科学オープンセミナーでの英語プレゼンテーションを義務づけるなどの施策を講じる。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
4	中期目標	高度な専門的知識の修得、俯瞰的な視野の獲得、専門応用能力/コミュニケーション能力の養成を進め、成果を学外発表できる人材を育てる。特に、国際会議での発表を推奨し、学位授与時の評価に用いる。
	年度目標	国際会議での発表を推奨し、論文発表データベースに登録し、活用する。
	達成指標	国内・国際会議発表のデータベースの登録数
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価
	自己評価	A

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		理由	国内・国際会議発表のデータベースに、27件が登録された。そのうち、国際会議発表は、12件あり、受賞論文も2件あった。	
		改善策	引き続き、国際会議での論文発表を推奨する。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	達成状況はSと判定する。理由は下記の通り。 (1)国内・国際会議発表データベースへの登録・運用が堅実に機能した。 (2)対外発表へのインセンティブ向上、学生相互の良い刺激となった。	
		改善のための提言	当該データベースの一層の円滑・効率的な運用管理に努める。	
No	評価基準	学生の受け入れ		
5	中期目標	一般入試、推薦入試等の制度を再検討し、学生にとって受験しやすい体制の確立と、入学者の適性判断の厳格化を目指す。DDP・IISTの活動を通じた留学生の確保に努める。		
	年度目標	一般入試の科目変更について、予想問題などを用意し、学生の不利益にならないよう配慮する。		
	達成指標	一般入試科目の科目変更に対する予想問題の作成。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	第1回一般入試は試験科目を変更し、新科目については、予想問題を学生に提供した。第2回一般入試は口頭試問による入試を初めて実施した。一般/推薦入試のガイドラインを研究科内文書にまとめ、教授会承認を得た。	
		改善策	初めての口頭試問による入試を行い、面接時間が短いなどの問題点が挙げられた。これらに基づき、ガイドラインの修正を進める。DDPについては、協定更新を完了する。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	達成状況はAと判定する。理由は下記の通り。 (1)第1回一般入試の試験科目の変更、第2回一般入試の口頭試問での実施、を成し遂げた。 (2)口頭試問での面接時間が短いなどの問題点が明らかとなった。	
	改善のための提言	口頭試問の実施内容および方法について改善を図る。		
No	評価基準	教員・教員組織		
6	中期目標	学部と連携した教員採用を行い、4つの研究分野に適切に配置する。オープンセミナーや複数教員による学外資金獲得活動を通して、教員の研究交流を活発にする。		
	年度目標	国際化専念教員を採用に際し、国際化の将来方針を明らかにし、適任者を採用する。		
	達成指標	国際化専念教員の採用。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	国際化専念教員を採用した。この専念教員を中心に、DDPプログラムの協定更新締結に向けた活動を進めた。	
		改善策	バランスの取れた教員組織の構成について、引き続き、学部と協力しながら、検討を進める。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	達成状況はAと判定する。理由は下記の通り。 (1)DDPプログラムの協定更新締結に向けて適格な国際化専念教員を採用できた。 (2)国際化の将来方針が必ずしも明確でない。	
	改善のための提言	4つの研究領域ごとの教員数のバランスを保持しつつ、教員の研究交流ならびに国際化を促進する。		
No	評価基準	学生支援		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

7	中期目標	学部と協力しながら、学生の学位取得後のキャリア支援体制を充実する。留学生向けの日本語教育の支援を継続する。	
	年度目標	インターンシップへの参加促進や、OB/OG 会や、ホームカミングデイを通じて、キャリア支援体制を強化する。	
	達成指標	インターンシップ講義への受講指導 留学生日本語教育の受講指導	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	インターンシップ講義の受講指導を行い、7名が受講した。ホームカミングデイを6月に移動し、OB/OGの参加しやすい環境を提供した。留学生向けの日本語教育は、ほぼ、全教が受講している。また、これに加えて、来年度から、学部と共同で、中上級向けの日本語教育科目の開講を決定した。
		改善策	夏のインターンシップに加えて、春のインターンシップと就職活動支援についても、更なる強化が必要である。
質保証委員会による点検・評価			
所見		達成状況はAと判定する。理由は下記の通り。 (1)インターンシップ講義の受講指導を徹底した。 (2)留学生向けの日本語教育を実施し、拡充策の検討も進めた。	
改善のための提言	インターンシップ講義の更なる充実などキャリア支援体制の一層の強化を図る。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
8	中期目標	社会貢献を意識した研究活動成果の公開を進める。外部資金による研究活動や共同研究を通じた研究内容の開示	
	年度目標	科研費の応募を積極的に進める。共同研究の実施状況を調査する。	
	達成指標	教授会などを通じて、科研費等の応募を推奨	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	科研費の応募を推進したが、研究科全体を挙げての組織的推奨活動には至らなかった。
		改善策	科研費の応募に対して、組織的な対応を強化する。また、科学技術フォーラムを始めとする対外的な研究成果の公開を積極的に進める。
質保証委員会による点検・評価			
所見		達成状況はBと判定する。理由は下記の通り。 (1)科研費等への応募を促進した。 (2)研究科としての組織的対応が未だ不十分である。	
改善のための提言	科研費等への応募率、共同研究の件数、などによる定量的な評価を進める。		
【重点目標】			
教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関する事】について、来年度から専任教員の科目を原則的に隔年開講に変更する。これに伴い、ガイダンスなどを通じて学生に対して履修上の注意を促す。また、学部4年生向けガイダンスにおいて、来年度に大学院に進学する学生に対して、教育に必要な科目について先取り履修を推奨する。			
【年度目標達成状況総括】			
教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関する事】について、隔年開講科目の周知と、4年生に対する先取り履修の推奨を、予定通り実施できた。また、論文発表データベースを活用し、学生の国際会議での発表は12件となり、順調に推移している。学生の受け入れに関しては、入試のガイドラインの整備と、新しく口頭試験による第2回入試を実施した。面接時間などの課題も明確になり、来年度に引き継ぐ予定である。このほか、教員採用、インターンシップへの誘導、科研費への応募状況など、ほぼ、予定通りの成果を達成することができた。			

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

2019年度目標の達成状況に関して、情報科学研究科では、2020年度からの専任教員の開講科目を基本的に隔年開講にする改正について、学生への周知の徹底を行うとともに、4年生に対する先取り履修の推奨を予定通り実施できたことは、評価できる。今後、隔年開講に伴う教育効果を検討することが望まれる。また、学生の受け入れでは、入試のガイドラインの整備と、新たな試験試験方法の実施を行ったことも注目に値する。今後、その効果を継続的に検証することが望まれる。学習成果に関する目標で、学生の国際会議での発表数が順調に推移していることも評価される。

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	内部質保証
1	中期目標	質保証サイクルを実質化し、かつ、記録に残すことで、教授会構成員全員の質保証の意識を高める活動を行う。
	年度目標	—
	達成指標	—
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
2	中期目標	情報処理学会あるいはACMが定めたカリキュラムを大学院向けに発展させた教科・科目を実施しつつ、先進的な教科・科目を柔軟に組み込む。学外研究機関や、産業界、地域社会等の多様な機関と連携し、研究タイプ・開発タイプなど多様なキャリアパスに対応した教育を展開する。国際化に向け、英語開講科目の設置や国際会議への参加を促進する教育体制を確立する。
	年度目標	産業界との連携の一環として、博士後期課程の社会人学生の教育のあり方について、早期修了を視野に入れた検討を行い、教育体制を整備する。
	達成指標	博士後期課程の社会人学生のための教育体制の整備。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
3	中期目標	学生に幅広い専門性を身に付けさせるため、複数の教員が研究指導を行うような組織的な教育・研究指導体制の定着を目指す。国際化に向け、英語力を点検できる教育課程を確立する。
	年度目標	COVID-19の感染拡大防止への対応や、社会人等の多様な学生の教育に向けて、オンライン授業形態による講義・研究指導の導入を進める。
	達成指標	オンライン授業を導入した科目の個数。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
4	中期目標	高度な専門的知識の修得、俯瞰的な視野の獲得、専門応用能力/コミュニケーション能力の養成を進め、成果を学外発表できる人材を育てる。特に、国際会議での発表を推奨し、学位授与時の評価に用いる。
	年度目標	COVID-19によって制限された状況下での学外発表について、長期化の可能性も含めて検討を行い、従来実績と比べて遜色のない、学生による研究成果の学外発表を目指す。
	達成指標	学生による学外発表の回数。
No	評価基準	学生の受け入れ
5	中期目標	一般入試、推薦入試等の制度を再検討し、学生にとって受験しやすい体制の確立と、入学者の適性判断の厳格化を目指す。DDP・IISTの活動を通じた留学生の確保に努める。
	年度目標	中国模範的ソフトウェア学院連盟とのDDP協定を更新し、留学生の受け入れを継続する。社会人学生を受け入れやすい入試体制を整備する。
	達成指標	学生による学外発表の回数。
No	評価基準	教員・教員組織
6	中期目標	学部と連携した教員採用を行い、4つの研究分野に適切に配置する。オープンセミナーや複数教員による学外資金獲得活動を通して、教員の研究交流を活発にする。
	年度目標	学部と連携し、教育・研究領域を網羅する教員組織を編成するための人事を行う。
	達成指標	教育・研究領域を定めた人事の実施。
No	評価基準	学生支援

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

7	中期目標	学部と協力しながら、学生の学位取得後のキャリア支援体制を充実する。留学生向けの日本語教育の支援を継続する。
	年度目標	COVID-19 に対応するために必要な学生支援について検討し、支援体制を整備する。
	達成指標	COVID-19 に対応した学生支援体制の整備。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
8	中期目標	社会貢献を意識した研究活動成果の公開を進める。外部資金による研究活動や共同研究を通じた研究内容の開示
	年度目標	外部資金による研究活動の一環として、科研費への応募を推進する。
	達成指標	教授会等における科研費への応募の推奨。
<p>【重点目標】 COVID-19 の感染拡大防止に対応したオンライン授業形態による講義・研究指導の導入を重点目標とする。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 特にオンライン会議システムを用いたリアルタイムの講義・研究指導によって、大学院教育に適した少人数教育・個別指導を実施する。</p>		

【2020 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

情報科学研究科では、2020 年度の中期目標、年度目標は、共に概ね適切に設定されていると考えられる。重点目標にあるように COVID-19 蔓延・長期化のリスク下にある現況において、オンラインによるリアルタイムの講義および研究指導が必要とされているが、理系大学院における効果的な教育および研究指導方法とその問題点を検証することに期待したい。社会貢献を意識した研究成果の公開を進めるという中期目標に対し、科研費への応募の推進を行うという年度目標は適切であるが、科研費への応募率等、定量的な指標による評価・検証が望まれる。

【大学評価総評】

情報科学研究科では、コースワークとリサーチワークを適切に組み合わせた教育を実施し、専門分野の高度化に即応できる教育が適切に提供されているとともに、外国人留学生を積極的に受け入れる体制を構築し、かつ外国人入学者数を安定的に確保している点が高く評価される。また、2019 年度より、リサーチワークおよび修士論文のセメスター化を実現し、学生が 9 月から 1 年間の留学や半期留学に柔軟に対応しやすい履修体系を整えたこと、中国模範的ソフトウェア学院との間でダブルディグリープログラム (DDP) を進めている点、英語で行う授業と日本語で行う授業を用意し、学生の能力に応じて選択できる点、海外学会での研究発表を強く奨励しそのサポートをしている点、留学生への日本語と日本文化についての科目を設置している点など、グローバル化推進に力を注いでいる点も高く評価される。さらには、情報科学研究科独自の取り組みとして、教員の研究テーマについて交流する場として、「情報科学オープンセミナー」を設定し、研究科内の FD 活動が適切に行われていることも高く評価できる。

中期目標・年度目標も概ね適切に設定されているが、達成指標などについてより定量的な指標の導入が望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。